

Title	生粋のハンガリー人像を追求して：ペテーフィ『勇者ヤーノシュ』とアラニュー『トルディ』を比較する
Author(s)	岡本, 真理
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 1 P.141-P.154
Issue Date	2009-03-11
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/5932
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

生粋のハンガリー人像を追求して

—ペテーフィ『勇者ヤーノシュ』とアラニュー『トルディ』を比較する—¹

岡本真理

OKAMOTO Mari

Abstract:

A népi hős ideálja Petőfi János vitézében és Arany Toldijában

A XIX. század magyar költői közül Petőfi Sándor és Arany János kiemelkedő abban is, hogy az úgynevezett irodalmi népiesség csúcspontját érték el, Petőfi lírai költészete mellett a "János vitéz" című elbeszélő költeményében, Arany viszont elsősorban a "Toldi" című eposzában. Tanulmányomban az újkori magyar irodalomtörténetben meghatározó témává vált nemzeti epika kérdését és a népies irány kibontakozását vizsgálom, majd a szóban forgó két epikus költeményt elemzem, és hőseiket hasonlítom össze.

A két költőnek azonos célja, elszakadva a romantika hagyományától a nép nyelvén írt, a népről szóló irodalom legyen az uralkodó. A népiesség nem csupán a művelődéstörténetben jelenik meg, hanem a reformkorban célul tűzött társadalmi változások, és a negyvenes években már a politikai reformok elősegítőjévé válik.

A két költő nyelvezetében mégis lényeges különbség észlelhető: Petőfi egyszerű, népmeszeszerű "népnyelv"-e a nép nyelvének zseniális és igen sikeres utánzása. Arany viszont "bennszülött", jól ismeri az egyszerű emberek, a parasztok nyelvét, amely a régi költészet archaikus nyelvével összefonódva alkotja az ő népies stílusát.

Ami a paraszthős mibenlétét illeti, nem lenne célszerű azon vitatkozni, hogy a két mű főszereplője közül melyik testesíti meg a "valódi" magyar paraszthóst. Mind a két alak a paraszti életmódban nevelkedett legény, aki bűneit vállalja, nagy gyötrelmeken át, rettenetes fizikai erőfeszítéssel tör előre a célja felé. Kukoricza Jancsi tiszta, jóakarátú és az erkölcs által szabályozott ideális legény. Toldit viszont érzései, indulatai irányítják: benne mély paradoxon uralkodik, amelytől soha nem tud megszabadulni. Jancsi csak a túlvilági, de ideális boldogságot éri el, Toldi viszont végig a világi dicsőség üldözője marad, és valóságos vágyat teljesíti, mikor elnyeri a király elismerését. A két

¹ 本稿は平成20年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「国家変容と言語問題のモデル的研究：ハンガリー語のケース」(課題番号：20520326, 研究代表者：岡本真理)の成果の一部である。

paraszthős tehát lényegében különbözik, melyeknek "igaz magyar" voltát a különböző korok olvasója különbözőképpen ítélné meg.

Keywords : Hungarian literature, epic, folk literature, peasant

キーワード : ハンガリー文学, 英雄叙事詩, 民衆文学, 農民

1. はじめに

ペテーフィ・シャーンドル (Petőfi Sándor 1823-1849) とアラニュー・ヤーノシュ (Arany János 1817-1882) という2人の詩人は、近代ハンガリー文学において民衆文学の頂点をなす双璧としてしばしば言及され、時代によってさまざまな形で批評されてきた。ここでいう「民衆 (népies)」文学は、19世紀前半の市民社会の成長と平行して、文学的志向が古典主義や初期ロマン主義から変化し、やがて農民層のことばと口承文芸を素材とする文学へと関心が変化して形成されたものをさす。その潮流は1840年代のペテーフィやアラニューの作品で頂点をなす。それを国民国家志向の形成の中で国民全体が自らのものととらえる「国民 (nemzeti)」文学へと評価したのが19世紀後半の文学批評であり、民衆文学 (irodalmi népiesség) を国民文学 (nemzeti irodalom) の座へと押し上げ、その社会的な功績を最大に評価した。こうして、「ペテーフィとアラニューはハンガリー文学における信仰対象、さらには英雄となり、彼らを除いては、おそらくハンガリー文学はおろかハンガリー国民について語ることもできない」[Margócsy 2003: 443]といわれるように、2人の詩人は後世においていわゆる一種の「信仰」現象にもなった。² その反動ともいべき世紀転換期の文芸雑誌『西方 (Nyugat)』世代は、民衆文学への過度な評価が詩人の個人的抒情的な真価を表面的なものに陥れていると警告するが、大戦間期の人民派作家らやそれを引き継ぐ戦後の社会主義批評は、再び民衆文学の民主的役割というものを全面的に評価するようになる。民衆文学、そしてペテーフィとアラニューという2人の詩人については、ことさら時代や社会のコンテクストから切り離して論じることはできない。

本稿では、2詩人の作品においてひととき民衆文学的特徴を顕示しているといえるペテーフィの叙事詩『勇者ヤーノシュ』(János vitéz, 1844年)とアラニューの叙事詩『トルディ』(Toldi, 1847年)を比較しながら、それぞれの作品が真にハンガリー的な英雄像をどのように描こうとしたのかを比較考察したい。双方の作品は書かれた時期が近く、強い影響関係が認められる。また、いずれも農民の英雄が活躍する物語として共通するところが多い。これら2つの「英雄的」農民像を明らかにするにあたって、まず1840年代にどのような背景から2つの作品が生まれたのかを、近代ハンガリー文学の流れの中で確認しておく。次に2人の詩人が実際にもった交流を追いながら、2人の民衆文学との関わり方や、詩人としての共通の目標について考える。そして、さいごに本稿の議論の中心となる2つの叙

2 「ペテーフィ信仰」の歴史については、Margócsy István, 2002, A Petőfi-kultusz határtalanságáról. *Studia Caroliensia* 2002/2. 96-112. in, *Égi és földi virágzás tükré: Tanulmányok magyar irodalmi kultuszokról*, Holnap kiadó, 2007.

事詩におけるハンガリー農民の英雄像がどのようなものであったのかを検証したい。

2. 近代ハンガリー文学における英雄的農民像の系譜

『勇者ヤーノシュ』も『トルディ』も、その主人公は農民である。近代ハンガリー文学において、農民が英雄として活躍する叙事詩はいつ頃現れるようになったのだろうか。そもそもなぜ「農民」が主役であり、また「叙事詩」である必要があったのであろうか。本章では、これらの問題を近代ハンガリー文学に現れた2つの潮流、すなわち歴史的叙事詩と民衆文学への関心という視点から整理し、その中で『勇者ヤーノシュ』と『トルディ』の両作品がどう位置づけられるかを考察したい。

(1) 歴史的叙事詩の伝統

19世紀後半の文学批評家ジュライは、ハンガリー人は英雄叙事詩に対して特に「敏感な」国民であると述べている。このことは、裏を返せば、ハンガリー人は歴史の中でずっと英雄叙事詩に「恵まれず」にきたということを表している。古代ギリシャの『イリアス』や『オデュッセイア』がキリスト教以前の文明の遺産を今日に伝えるだけでなく、ヨーロッパには例えば古代ゲルマン民族の英雄が活躍する『ベオウルフ』や中世ゲルマン民族の歴史を描いた『ニーベルンゲンの歌』、また北欧へ目を向ければ北方ゲルマン民族の神話や歴史を記した『サガ』などがある。これらの叙事詩は、民族の古い伝説や神話の物語を今日に伝えると同時に、その言語がかつてどのような姿をしていたのかを知るための重要な手がかりとなる。また、これら古代や中世に書きとめられたものに限らず、近代に入ってから収集または創作された叙事詩もある。近代ヨーロッパにおける民族意識の覚醒とともに、それまで口承で伝わってきた民族固有の神話や英雄伝に光が当てられ、それらを掘り起こし、文学作品に仕立てたものである。その代表的な例がフィンランドの『カレワラ』であろう。19世紀前半に『カレワラ』の物語詩が採集・編纂され世に出たことによって、民族の言語的遺産は古代や中世の写本の中に閉じ込められているばかりではなく、今なお人々の口から口へ受け継がれて生き続けていることが示された。

これに対し、ハンガリーには古代から伝わる民族固有の神話や英雄伝説といったものが見当たらなかった。ジュライは「ハンガリー人は、これが我々の叙事詩の断片だと胸を張ることのできるものをたった一つも持ち合わせずにこれまで生きてきた」と述べ、その理由として、ハンガリー人は外国文化の影響や複雑な政治的緊張に絶えずさらされてきたため、またそれにもまして、キリスト教の浸透によって数多くの民族独特の伝統をすべて失ってしまったためであると説明している。原初のリズム感豊かなハンガリー語叙事詩の代わりに残されたのは、中世ラテン語で書かれた無味乾燥な年代記だけであり、それらがハンガリー詩のみずみずしい美しさを完全に拭いってしまったと嘆くのである。³

3 Gyulai Pál, "Toldi estéje", *Szépirodalmi Szemle*, 1854, <http://magyar-irodalom.elte.hu/sulinet/igyjo/setup/portrek/arany/gyulaaj1.htm>

このようなハンガリー人の「叙事詩コンプレックス」ともいえる状況は、やがて文学的ナショナリズムが強まる時代になると、詩人たちの中にハンガリー固有の叙事詩を取り戻したいという強い欲求を起こさせた。とくに1830年代に続々とフィンランドの民族神話が世に出たことは、ハンガリー人と同じようないわゆる「歴史なき民族」が精神的支柱になりうる叙事詩文学を築き上げた例として、当時のハンガリー文学界を大いに刺激したものと考えられる。こうして19世紀のロマン主義詩人たちは競うように民族叙事詩の創作に心血を注ぎ始める。ただし、その題材は天地創造や民族の起源といった神話ではなく、ハンガリーの古代史や中世史に求められた。それは『カレワラ』のような民族固有の神話と確信できるものを、ハンガリー語の口承文学の中に見出すことができなかつたからであり、その代わりに詩人たちは中世の年代記に記録された王侯貴族の悲劇や騎士の武勇伝などを研究し、それにロマン主義的な想像力を加味し、ドラマチックな物語を創造したのだった。また、形式としては、叙事詩と並んで劇作が好んで採用された。その理由は、近代的市民社会の成長とともに演劇が都市市民層の娯楽として普及しはじめ、これが国民文学の浸透にますます重要で効果的な手段となっていくことを文学者たちは見抜いていたからである。1837年にはハンガリー語で上演する最初の常設劇場である国民劇場が創設され、ハンガリー民族のカルパチア盆地定住時代を扱ったロマン派詩人ヴェレシュマルティ(Vörösmarty Mihály)の劇作『アールパードの目覚め(Árpád ébredése)』がその柿落としを飾った。こうして劇作というジャンルには文学的ナショナリズムの宣伝装置としての新たな性格が付加されたのである。

このような中で生まれた歴史的劇作の代表的な作品に、中世ハンガリーの王宮で繰り広げられる悲劇を扱ったカトナ(Katona József)の『バーク・バーン(Bánk Bán)』があげられる。また、ヴェレシュマルティは、特に1820から30年代にハンガリーの歴史をテーマにした数多くの叙事詩と戯曲を発表し、歴史的劇作において中心的な役割を果たした。⁴

(2) 民衆文学と農民の英雄の出現

以上のように、近代ハンガリーでは国民文学の創造を歴史的叙事詩の中に探っていたが、その一方で民衆の口承文化への関心も徐々に高まっていた。民謡や民話といった、それまでほとんど文字にとどめられることがなかつた口承文化が、過去から連綿とつながる民族固有の言語文化として知識人の注目するところとなったのである。

ホルヴァートによると、民謡などの民間伝承に対する関心は、近代ハンガリー文学の夜明けとされる18世紀末の啓蒙的知識人ファルデイ(Faludi Ferenc)やベッセニェイ(Bessenyei György)の頃ですで見られ、18世紀末に大ヒットしたドゥゴニチ(Dugonics

4 ヴェレシュマルティの叙事詩の主なものにマジャル民族のカルパチア盆地定住の時代を扱った『ザランの逃走(Zalán futása)』(1825年)がある。また、20年代から30年代に次々に歴史を題材に膨大な数の戯曲を発表した。ヴェレシュマルティの劇作については、Vörösmarty Mihály *dramái művei*, Osiris, 2005を参照。また叙事詩と劇作の諸作品については、Klanciczay Tibor (szerk.), *A magyar irodalom története*: 145–147.

András) の前ロマン派的戯曲『エテルカ (Etelka)』やチョコナイ (Csokonai Vitéz Mihály) の喜劇『テンペフェーイ (Tempefői)』などの作品に民謡のモチーフが認められる。初期の段階では特に民謡、つまり歌が主要な関心事で、口承文学のバラードや民話はまだほとんど知られていなかった。[Horváth 1927: 103] ドイツロマン主義の影響によって、民衆の口承文学の発掘は19世紀初頭には次第にハンガリー文学の中心的関心事の一つへと発展していった。この頃、ハンガリー語をラテニズムやゲルマニズムから解き放ち、ハンガリー語独自の造語法をもって豊かにしようとする言語改革運動が頂点を迎えたが、その積極的な推進者らもまた、民謡が蓄えた豊かな言語的遺産に注目していた。⁵ 中でも言語改革の熱心な推進者であったロマン主義詩人ケルチエイ (Kölcsey Ferenc) の民謡への思い入れは強烈である。彼は、ハンガリーでは創作文学が始まった時にはすでに民族古来の詩歌は捨て去られてしまっていたとし、古代への回帰願望が今、民謡への関心と呼び覚ましたと論じた。民謡をハンガリー文学の伝統のすべてと対立するものとして位置づけたのである [Horváth 1927: 122-125]。

個々の詩人が作品に好んで民謡のモチーフを取り入れ始めただけでなく、新聞や雑誌もまた、民衆文化に注目するようになる。1780年に発行された最初のハンガリー語の新聞『ハンガリー報道 (Magyar Hírmondó)』や19世紀前半の主導的な文学雑誌である『学術論集 (Tudományos Gyűjtemény)』も、民謡に対する関心の喚起に力を入れ、さまざまな民謡を掲載したり、民衆文学的要素をもつ詩などを紹介した。1840年代になると、科学アカデミーやキシュファルディ文学協会などの文化学術機関が民間伝承の発見や収集の成果を積極的に掲載するようになり、さらなる収集へ向けて政策的な啓蒙活動を繰り返していく。キシュファルディ協会が民謡や昔話などの収集を3巻本として発表したのは、1848年革命の直前であった。⁶

ただ、真の民間伝承文学と創作である民衆文学は、本来区別してとらえるべきものである。文学協会などの呼びかけで収集された歌謡や民話の中にも、当時実際に農村で人々の口から自然に聞かれたものなのか、またはそれに似せた文学者の創作なのか、なかなか判別できないことが多かったようである。今日我々が考える民俗学的な伝承の収集と文学的創作の境目はまだあやふやであったが、この境界を厳密にする必要性はこの時期まだほとんど意識されていなかったといえるだろう。文学者たちが民間伝承文学を収集したのは、それを材料にして文学に本来の民族的個性を取り戻すというプラグマティックな目的のため

5 言語改革運動の中心的人物カジンツィ (Kazinczy Ferenc) もヘルダーをハンガリーに紹介し、ヴーク・カラジッチのセルビア民謡をもとに詩作を試み、同時代の詩人らの民謡をもとにした作品に関心を向けていた。しかし、彼の多方面にわたる啓蒙主義的な知的関心からすれば、これらはほんのわずかの比重を占めただけで、どちらかというハンガリー語文学の文体改良のための試行錯誤に利用したという程度にとどまったといえる。Horváth 1927: 106-107.

6 Erdélyi János (szerk.), *Magyar népköltési gyűjtemény. Népdalok és mondák*. A Kisfaludytársaság. Pest, 1846-48 (I. köt. 1846, II. köt. 1847, III. köt. 1848). 予定されていた4巻目は1848年革命のために遅れ、『ハンガリーことわざ集 Magyar közmondások könyve』として1851年に出版された。Magyar néprajz, V. köt. Folklor 1. (<http://mek.oszk.hu/02100/02152/html/05/4.html>).

めだったからである。

また、書き手の社会的背景についていえば、近代初期まで自らの世界のみをそのことばで描いていた貴族層知識人が、やがて農村に生きる民衆の世界を発見し、彼らのことばを取り入れ創作していったのが民衆文学の始まりといえる。当初は貴族が遠い異質な農村世界に関心を向け、民謡などの手に入るわずかな材料を頼りにその想像の世界をふくらませたものだった。しかし、やがて19世紀に入ると、書き手自身も小都市の市民層など民衆により近い世界から現れ始め、民衆のことばをより身近で自然に感じる書き手たちが登場するようになるのである。

このような流れの中で生まれた初期の創作民衆文学の代表的なものに、ファゼカシュ (Fazekas Mihály) の叙事詩『ガチョウ飼いのマティ (Lúdas Matyi)』とガライ (Garay János) の戯曲『ハーリ・ヤーノシュ (Háry János)』がある。1817年に出版された『ガチョウ飼いのマティ』は、怠け者のマティが家のがちょうを売ろうと世の中に出て、そこで弱者を理不尽に苦しめてばかりいる専制的で邪悪な地主に出会うが、知恵を働かせて見事に3度もこの地主を懲らしめるといった物語である。この作品では貧しい百姓の若者が非人間的な権力者に懲罰を与えるといった民衆の立場に立った世界観が、ユーモアに満ちた軽快な民話的リズムで表現されている。⁷ また『ハーリ・ヤーノシュ』は、ナポレオン戦争から帰還した一騎兵が故郷の村の居酒屋で語る奇想天外な思い出話である。主人公ハーリはナポレオンを捕らえ、フランスとオーストリアとの戦争による損害賠償契約に署名させるなど、こっけいなほら吹き話が満載の喜劇である。この作品も、当時の社会に生きる庶民の目線で語られた爽快なおとぎ話として、1843年の発表当時から絶大な人気を博した。(また、これは20世紀に作曲家コダーイが組曲にしたことによって、今日世界的に知られる作品となった。)

これらの作品は、典型的なハンガリーの農村から出た貧しい若者が、社会の支配層の人間を鮮やかに征伐するという内容で共通している。市民革命に向って成熟していこうとする市民社会が、このような“正義のヒーロー”を歓迎し、主に都市の市民層の娯楽として広がった演劇がこれらのヒーローを活躍させるようになったのである。

(3) 『勇者ヤーノシュ』と『トルディ』の位置づけ

それでは、本論のテーマとなる2つの作品は、上述のような近代ハンガリー文学の流れの中でどのように位置づけることができるだろうか。

ベテーフィの『勇者ヤーノシュ』は、民衆文学の興隆という流れの中で、すでに生まれたマティやハーリ・ヤーノシュのような人物像の延長線上に生まれたキャラクターであるといえるだろう。イーエーシュは『ハーリ・ヤーノシュ』がベテーフィの『勇者ヤーノシュ』の創作に何らかの影響を与えただろうと推測している。[Illyés 1936: 129] 確かに、ハーリがナポレオンを倒し、その妻マリー・ルイーズが彼の勇姿に恋してナポレオンに離

7 Fazekas Mihály, *Lúdas Matyi, válogatott művek*, Osiris, 2000, 162.

婚宣告を突きつけるものの、ハリーは宮廷の女性との結婚を毅然として拒否し、故郷の村の恋人との愛を成就するという物語と、勇者ヤーノシュがフランス王と王女を救った後、2人を思いやりつつもフランス王位の勧めをきっぱり断り、故郷のハンガリーの村に残した恋人のもとへと急ぐ物語には共通するところが多い。貧しい若者が、高い社会的身分や財産といったものに一切の価値を見出さず、逆にそれを一蹴してしまう爽快感というものがそこにある。

一方、アラニユの『トルディ』は、もともと16世紀の吟遊詩人イロジュヴァイ (Ilosvai Selymes Péter) が叙事詩『有名で名高きトルディ・ミクローシュの活躍と闘いの物語』(Az híres neves Tholdi Miklósnak jeles cselekedeteiről és bajnokoskodásáról való história, 1574年)で描いた中世の実在の人物を題材に、アラニユが叙事詩にしたものである。⁸ 貧しい農民トルディが超人的な力を発揮し、やがて王に認められて宮廷の最も名誉ある騎士になるという物語である。伝説的な活躍をした中世の実在の騎士という歴史的人物を扱いつつながら、アラニユはそこに粗野であるが力の強い農民の若者の姿を重ね合わせた。ペテーフィの『勇者ヤーノシュ』が民衆文学が最も成熟した頂点に書かれたとするなら、『トルディ』は歴史的叙事詩と民衆文学、この2つの流れが合わさったところに誕生したといえるのではないだろうか。

2つの作品は一見よく似た性格をもつように見えるが、その言語にはある興味深い相違点を感じ取ることができる。それは、作品にあらわれる“農民ことば”の性格である。「ペテーフィは、どちらかといえば民衆の想像の世界にすっぽりと入ってしまうことができる非常に才能を持ち合わせていたにすぎない。…(中略)…(ペテーフィは)新しい世界を征服することの喜びで民衆詩の世界にのめり込んでいったが、アラニユはその世界に生まれ育ったのである」というケレストゥリのことばが、2つの作品の言語の違いを端的に表現している。⁹ 『勇者ヤーノシュ』の物語は完全な詩人の創作であるにもかかわらず、終始一貫してまるで本物と見まがうような完全な民話調で語られている。つまり、ペテーフィはその創作にあたって民話の言語を研究し、それを完全に吸収して自分のものとした。彼自身は小都市の下流市民層の出身であるが、本来自分のものではない農民のことばを自分自身の中で醸成し、彼自身が農民になりましたかのように、そのことばを完全なまでに自然に再現することができた。平易で素朴なことばの使いまわしや、誰が読んでも真の民話と疑うこともないようなリズムがこの作品の言語的特徴であるが、実際そこには都市の市民が耳にしたこともないような土にまみれた農民のことばはほとんど現れない。それに対してアラニユの『トルディ』では、農具や食物の名前、人々の会話の中に出てくる表現

8 イロジュヴァイによるトルディの物語については、Ilosvai Péter, *Toldi Miklós históriája*, ハンガリー電子図書館 (<http://mek.oszk.hu/00600/00673/00673.htm>) を参照。『トルディ』はのちに『トルディの晩年』(1854年)『トルディの恋愛』(1879年)とともに3部作となる。『トルディの晩年』は1848年革命前に一旦は完成されていたが、革命後の混乱のために出版を遅らせることとなった。最後の『トルディの恋愛』の完成までを考えれば、アラニユはほぼ生涯にわたってこの人物像と向き合っていたともいえる。

9 Keresztury, <http://mek.oszk.hu/01300/01360/01360.htm>.

など、彼の生まれ育ったハンガリー大平原南東部の農民だけが日常使うような語彙や表現に満ちており、それがトルディという人間の粗野さや力強さを引き出している。アラニユ自身が子ども時代から農民の世界で育ち、そのことばは彼にはネイティブのものであった。このような“農民ことば”を解しない市民層読者のために、アラニユは作品のところどころに説明も施している。¹⁰ 作品はこのように現実の農村で農民が話す素朴なことばを多く取り入れながらも、古の吟遊詩人の格調と混じり合って、古風で力強いものとなっている。

3. ペテーフィとアラニユにとっての民衆文学

アラニユはペテーフィの『勇者ヤーノシュ』に刺激を受け、そこから「トルディ」が生まれ、彼は真の民衆詩人となったといわれる。2人の関係は「ハンガリー文学におけるもっとも美しい友情」とよく称されるが、実際2人は深い人間的交流で結ばれ、互いを大きく刺激しあった。この章では、2つの作品の比較にあたって、ペテーフィとアラニユの交流関係に言及しながら、2人のめざした民衆文学の性格と目的について考えてみたい。

(1) 若きスターペテーフィと遅咲きのアラニユ

ペテーフィは1823年にハンガリー大平原中部の小さい町キシケウレシュで肉屋の長男に生まれ、子ども時代から教育熱心な父親の指南もあり、ハンガリー国内の学校を転々としながら育った。学校時代からすでに詩作に優れた才能を発揮しはじめていたが、やがて文壇を代表する存在であった詩人ヴェレシュマルティに見出され、ペテーフィが20歳の時に文学雑誌『アテネウム』に初めて詩が掲載された。彼の才能に注目していたヴェレシュマルティ自らが文学界の各人に熱心に経済的援助を募った末、1844年にはペテーフィ最初の詩集の出版が実現する。この詩集によって、彼は瞬時にしてハンガリー中から注目を浴びるようになり、一気に時の詩人となった。ハンガリー民話の色調に満ちた叙事詩『勇者ヤーノシュ』を発表したのはその翌年、ペテーフィ22歳の時である。

一方のアラニユは、大平原の南東部にある農村と町の間のような性格の町ナジサロンタ（現ルーマニアのサロンタ）に、貧しい農民夫婦の末っ子として1817年に生まれた。ほんの一時であるがハンガリー東部の都市デブレツェンにある名高いカルヴァン派ギムナジウムに学んだことを除けば、彼はずっと故郷の町に住み、年老いて病気がちな両親を支え、早くに結婚し、町役場の事務員の仕事で得たささやかな収入で家族を養っていた。平凡な日常の中で、アラニユは夜毎自宅の小さな部屋で古典から同時代までのさまざまな文学作品に没頭し、「ホメロスとシェークスピアとともに過ごす」[Alföldi: 20-21] という生活を送っていた。

10 たとえば、トルディを追いかけてブダに着た下男ベンツェが「ほら、“鳥が見たパン切れ”(madár-látta cipó)を持ってきましたよ」と言う部分で、アラニユは「農民が肩掛け袋に入れて畑仕事から持ち帰ったパン切れを子どもにやる時に、おどけていうことば」と説明している（第十歌）。また、そのパン切れの中に母が隠した金を見つけ、「手がかゆくなりそうだ」というところで、「農民たちのあいだでは、手がかゆいと金が手に入る兆しを意味する」としている（同じく第十歌）。

若くして文学界の寵児となっていたペテーフィと、都会ベシュトから遠くはなれた大平原の町で役場勤めをしていたアラニュ。まるで対照的な半生を送っていた2人に接点はなかった。その2人が出会うきっかけとなったのが、アラニュの作品『トルディ』であった。

(2) 2人の友情と民衆文学

アラニュは『トルディ』を書く前年に最初の作品を発表した。当初アラニュは仕事の合間に書き溜めていた自分の作品を公表することなどは考えてもみなかったが、友人に強く勧められ、ベシュトのキシュファルディ文学協会の懸賞に諷刺叙事詩『失われた憲法 (Az elveszett alkotmány)』をもって応募した。匿名で届けられたこの作品が受賞を果たしたとき、審査員の一人であったロマン派文豪ヴェレシュマルティはこの作品の「洗練さのないことば」を酷評した。「これではまるでハンガリー文学の鉄器時代ようだ」とひどく皮肉ったという。[Keresztury 1974: 52-54]

その翌年、再び同協会は懸賞作品を公募した。テーマは「民間口承に生き続けている人物を主題とした形式・精神ともに民衆的な作品」であった。これに対して書かれたのが『トルディ』である。ペテーフィは文学協会ではいち早く作品を読み、読後の感激冷めやらぬまま、その日のうちに見知らぬこの作品の作者に対して手紙を出した。その中でペテーフィは民衆文学に対する熱い思いを次のように語っている。

「民衆詩こそ真の詩です。これを支配的にしようではありませんか。民衆が詩の世界で支配するようになれば、もう次には政治の世界でも支配するようになるでしょう。そしてこれこそ時代につきつけられた課題であり、これを勝ち取ることがすべての気高き心をもつ者の目標なのです。」[Alföldi: 17]

ここに表れているように、ペテーフィは、民衆が主役となり民衆のことばで語られ、民衆の目線で見える文学こそが、社会を変革する原動力となると確信していた。彼は、一世代前の文学において支配的な“貴族的”ロマン主義と決別し、一から新しい民衆文学を創作したいと考えていた。これはペテーフィにとって意識的な試みであり、究極的には明確な政治的目的をもつものであった。実際、彼はその目的を生涯をかけて実現したといってもよい。彼の叙情詩集はハンガリーでは空前の部数で出版されて読者をつかみ、やがて1848年の市民革命では自由と平等を目指してペンではなく武器を持って闘うのである。

そのペテーフィは、アラニュの『トルディ』を読み、無骨だが力のみなざる農民の姿と、詩全体にあふれた生き生きした農民ことばに心を打たれた。アラニュへの手紙に添えた詩「アラニュ・ヤーノシュへ (Arany Jánoshoz)」では、「君の歌はまるで大平原プスタに鳴り渡る鐘のように素朴であり、また混じり気もない」と『トルディ』のことばを絶賛している。ペテーフィは、この作品の作者こそ、自分と同じ文学の目的を持つ人物であると直感したに違いない。手紙の中で、「民衆の苦しみを誰もやわらげることがないのなら、われら詩人がそうしよう。彼らのために歌おうではないか」とアラニュに対して呼びかけて

いる。[Alföldi: 19] ペテーフィは、『トルディ』を書いたアラニュこそ、ハンガリーの民主的改革を目指してともに力をあわせていける仲間だと考えたのである。このうち、1849年夏のペテーフィの戦死まで、2人は2年半にわたる友情の絆を作り上げた。この間、交わした書簡は60通を超える。

2人の交友は書簡だけにとどまらなかった。積極的に行動するペテーフィは地方に暮らすアラニュを何度も訪ね、また文学と文化の中心地として急成長を続ける都市ペシュトへ彼を呼び寄せ、文学者仲間に紹介した。アラニュは実際は内省的な性格の持ち主で、ハンガリーの詩人や作家の中でアラニュほど政治的でない性格の人物は少ないと後世に評されたくらいである。¹¹ その彼が、情熱的なペテーフィの行動力に圧倒されながら、彼とともに活動の範囲をどんどん広げていったのである。

1840年代のペシュトの若い文学者グループは、詩作に専念するだけでなく、大衆向け新聞を刊行するなどの活発な活動を繰り返していた。女性を含めた広い読者層に、文学だけでなく演劇批評や民謡、女性の流行のファッションなどの総合的な情報を提供する大衆紙がこの頃すでに大流行となっていた。生活の糧としてそれらの編集や記事の執筆を請け負ったのが若い詩人や作家らであった。ペテーフィが1844年から46年まで副編集長をしていた『ペシュト流行紙 (Pesti Divatlap)』や、作家ヨーカイ (Jókai Mór) が当時まだ22歳の若さで編集長を務めた『生活図絵 (Életképek)』は、2～3千という発行部数に達し、ペシュトの若い進歩派市民の代表紙となっていた。¹² ペテーフィは、1848年革命が勃発すると、コッシュート革命政府が発行する農民向けの啓蒙の新聞『民衆の友 (A nép barátja)』の編集をアラニュに依頼する。アラニュはためらいながらもこの重責を請け負い、のちには革命政府の内務大臣となって、デブレツェンにおけるハンガリーの独立宣言にも立ち会うこととなる。

自由戦争が敗北するまでのわずかな時間であったが、これがアラニュの65年の人生の中でもっとも大胆に行動した時期だった。1849年以降、最良の友を失い、その後の長い人生を「国民詩人」としての重圧と社会的責任を受けとめ、孤独の中で神経症と精神的苦悩を抱えながら膨大な仕事をこなした彼にとって、これはつかの間の輝くような青年時代だったといえよう。

4. 『勇者ヤーノシュ』と『トルディ』 – その人物像

前章では、『勇者ヤーノシュ』と『トルディ』という2つの作品は、同じ時代に生き、共通の理想をもつ2人の詩人によって創作されたということを見てきた。2人が目指した民衆文学は、農民や庶民の世界を彼ら自身が読むためにそのことばで描くというだけでな

11 例えば、20世紀前半のリアリズム作家モーリッツは、ペテーフィに比べてアラニュには農民のための社会改革に対して大胆に行動する勇気が足りなかったと批判している。[Móricz 1931: 613–621]

12 1840年代の流行紙 (divatlapok) とそれに関する若い作家らの活動については、Fábri Anna, *Az irodalom magánélete*, Magvető, 1987, 687–701を参照。

く、それを通して社会の変革に向けて人々が啓蒙され、鼓舞されるべきものであった。ところで、2つの叙事詩に描かれた英雄は、同じようにハンガリー農民を理想化して描いているといえるだろうか？ 本章では、両作品の中の英雄像について共通点と相違点を整理し、その上でそれぞれが「生粋の」ハンガリー農民像をどのように体现しようとしたのかを考えてみたい。

(1) ヤーノシュ像

ペテーフイの叙事詩『勇者ヤーノシュ』¹³のテーマは愛である。主人公はある貧しい農村に生きる孤児の羊飼いくコロツァ・ヤンチである（「クコロツァ」はとうもろこしの意、ヤンチはもっとも一般的なハンガリー男性の名前ヤーノシュの愛称）。村のとうもろこし畑のあぜに捨てられ泣いていた赤ん坊は心優しい継母と厳しい継父に育てられ、やがて同じ村のもう一人の孤児である美しい娘イルシュカと愛し合うようになる。このイルシュカとの愛の成就がこの詩の一貫したテーマとなっている。

ヤンチはまだ「まだ二十たびも冬を越さない若さであるが、若者二十人分の力を持つ」（第3歌）力持ちである。勇敢でまっすぐな性格であり、その怪力は恋人や正義を守るためとなれば存分に発揮される。物語は、羊の番をしていたヤンチが小川で洗濯をしていたイルシュカを誘い、二人が時を忘れて愛を語り合っている間に、羊の群れのほとんどが姿を消してしまう事件に始まる。憤りのあまりに熊手を手にヤンチを殺さんばかりにとびかかってきた継父を暴力で押さえ込むことは簡単であろうが、育ての父に対する感謝と愛情から、彼はただその場から逃げ、二度と家に帰ることはなかった（第3歌）。

愛するイルシュカと悲しい別れをしたのち、ヤンチは村を後にして旅立つが、そこに待ち受けていたのはさまざまな冒険であった。森の中の隠れ家にいる盗賊たちを始末し、ハンガリー騎兵隊の立派な装束に憧れて入隊するや、誰よりも見事に馬を乗りこなす、剣を扱う。このあたりから物語はいっそう空想の世界に踏み込んでいき、彼の部隊は「7つの犬の頭を持つタートル人」の国を通り、「永遠の寒さの国」イタリアを越え、ポーランド、インド、そして「インドと境界を接する」フランスまでやってくる。そこでハンガリー軍が見たのは、トルコの侵略により荒廃した国土や、全財産と愛娘を奪われてうろたえるフランス王の姿であった。ヤンチは勇敢に戦ってトルコ軍を打ち負かし、王女を救い出す。そしてフランス王から与えられた莫大な報償金を持ってようやく帰路に着くものの、船は嵐で粉々に砕けて宝は海に沈む。九死に一生を得たヤンチは伝説の大鷲の背に乗って、あのなつかしいイルシュカの待つ故郷ハンガリーの村を目指すのであった（第17歌）。

主人公ヤンチの思いは恋人への愛のみに貫かれ、恋愛の成就がすべてであり絶対である。名誉や財産には一切の価値を見出さない。また彼の人間性は、こまやかな愛情と思いやりに満ちている。どのような状況でも善と悪に対して確固たる判断を下し、その行動や感情は一貫して合理的であり、迷いがない。彼の行動のすべてが一点の曇りもない「善」なの

13 *Petőfi Sándor összes versei*, 2001, Osiris, Budapest. 245–294.

である。森の盗賊たちの穢れた金を村に持ち帰り、安易に恋人と結ばれる道を取らず、孤獨な放浪を続けることや、救い出したフランス王女からの結婚の申し出やフランス王の座をも、思いやりに満ちた優しいことばで、しかし断固とした態度で辞退し、恋人への思いを貫くところなど、さまざまな場面に彼の英雄的な「善」がにじみ出る。

しかし、彼の愛はこの世で成就されることはない。故郷の村に戻った主人公が見たのは、継母の虐待の末にとうに命を落とした恋人の墓だけであった。耐え難い悲しみにも耐えながら再び旅立った彼は、その並外れた力を使って魔女の国では魔女らを退治し、巨人の国では巨人らを下僕に手なずける。やがてオペレンツィア海¹⁴の向こうの妖精の国に辿り着くが、そこはこの世の悩みも苦しみもない夢の世界であり、そこでやっとヤンチは恋人イルシュカを取り戻し、2人は妖精の国の王と女王となって幸せに暮らすのだった（第27歌）。

『勇者ヤーノシュ』は一見して子供向けに書かれたユーモア豊かな楽しい民話のようである。しかし、ヤンチは恋人の愛撫に夢中になって羊の群れを見失うという、最初のたった一つの過ちにより、現世で幸せになる権利を永遠に奪われてしまうという悲劇性がそこにはある。彼は、現実世界ではなく、妖精の国（すなわち死の世界といえるだろう）でしか愛を成就することができないのである。

（2）トルディ像

『トルディ』¹⁵もまた、不幸な境遇から生まれた人物の物語である。主人公は父を亡くし、年老いた母と二人、大平原の農村で農民としてつつましい生活を送っている。トルディには兄があり、彼は狡猾さと貪欲さで出世し、ブダのラヨシュ王のもとで上流の騎士として奉仕している。トルディもまた型破りな力持ちである。物語中でその力が最初に発揮されるのは、下僕たちを率いて久しぶりに王宮勤めから帰省した兄に侮辱された時であった。トルディがその怪力で投げた粉ひき石は、兄の下僕の一人に直撃する。この時からは彼は殺人という重い罪を背負い、住み慣れた村と悲しみにくれる母を後にして逃亡を余儀なくされる（第3歌）。このように、彼の並外れた力は、勇者ヤーノシュのように正義を貫くために発揮されるのではなく、このあとも物語の随所で殺意や復讐、悲しみといった自分でも制御しきれない強い自己感情のほとばしりとともに使われるのである。

トルディは社会的地位への強い執着を持っている。物語の始まりにおいてすでに殺人犯という罪を背負うが、なお出世した兄に対して醜いまでの嫉妬心を持ち続け、自分も何とかして優れた騎士になりたいと願う。また、その行動は荒々しく野蛮なまでである。逃亡中は森の中の野鳥の巣を荒らしてその卵を飲んで空腹を癒し、狼に襲われると素手で闘い殺す（それを丁寧にも村へ戻って兄の寝室の前に置くほどの恨みぶりも見せる）。ブダの町に辿り着いた彼は、町中で暴れていた獐猛な雄牛を両手で難なく押さえ込み、その勇敢

14 ハンガリー民話に頻繁に登場する架空の海。果てのない海とされている。

15 Arany János, Toldi, in *Arany János költeményei*, 1983, Helikon, Budapest, 775–823.

ぶりに町中の人々は喝采を送る (第9歌)。

そしてこの町でもっばら深刻な問題となっていたのは、次から次へとハンガリーの勇者に決闘をつきつける、とあるチェコ人の存在である。2人の立派な息子をこの者に殺されたという老婆の涙に、トルディは故郷に残る母の悲しみにくれる姿を重ね、このチェコ人を倒すことを老婆に誓う (第7歌)。決闘はドナウ河の中洲で行なわれ、トルディは圧勝する。彼は最初、命乞いをする敵を許してやろうとするが、相手が不意打ちを試みてきたことがわかると、ついにその首を斬りおとす (第11歌)。トルディの活躍ぶりを遠目で見ていた王は、彼を呼び寄せ、領地と最高の騎士の称号を与える。一方兄はそのずるさを暴かれ、王の前で屈辱を受ける (第12歌)。

トルディは確かに若く力の強い猛者である。暴れる異邦人からハンガリーの国を見事に守りきり、騎士という彼の熱望した社会的地位を手に入れる。しかし一方で、彼はとてつもない激情の持ち主でもあり、それを抑制することができない。彼はそのような欠点の結果として、絶えず孤独とみじめさに苦しみ続けるが、同時に社会的成功への渴望に突き動かされて常に前進していく激しいエネルギーを持っている。

勇者ヤーノシュに比べると、トルディの英雄としての完全性はずっと低いところにとどまっているように感じられる。彼はヤーノシュのように清くまっすぐな理想的人物ではない。完全な人間性というにはほど遠く、欲望・嫉妬・怒りから、みじめさや悲しみといったさまざまな矛盾を抱え込んだ生身の人間の脆弱さがそこには見え隠れしている。それでも、彼はヤーノシュのように現実から遠く離れた「妖精の国」で幸福を手にするのではなく、その情念と力をもって、あくまでも現実社会での成功と栄誉を掴み取るのである。その姿は「理想的」とはいえないであろうが、生命力ある「生身」のハンガリー農民を映し出しているようである。

5. 「生粋」のハンガリー人像を追及して ～むすびにかえて

両作品が書かれた1840年代からおよそ1世紀が経った頃、イーエーシュはそのペテーフイ伝の中で、『勇者ヤーノシュ』の世界の描写について、「勝ち誇ったような躍動感が、現実のハンガリー的世界から、徐々に空想の、これもまたハンガリー的な世界へと昇華していく」と表現している [Illyés 1936: 129]。大戦間期の人民派作家イーエーシュは、理想化された勇者ヤーノシュの完全なまでの道徳性や誠実さの中に、健全で善良なるハンガリー農民の総体を見出している。一方、トルディの中に見られるハンガリー人の普遍性について、セルブは次のように述べている。「トルディは情動的な性格で、感情や悲しみ、愛、怒りなどの衝動と魂の虜であり、知性や良識ある生き方が彼を支配することはない。トルディは己の怒りのために罪に陥る… (中略) …アラニューはハンガリー人個々人の運命をこの象徴の中に要約したのだ。」 [Szerb 1935: 358] 大戦間期の不安定な政治情勢の中でハンガリー文学史を記したユダヤ人作家セルブは、ハンガリー人がたどってきた“悲劇的運命”の根源を、トルディという人物の中に現れる純粹さと激しやすさという危うい弱さの中に普遍的なものとして見ていた。

「理想的」なハンガリー人像に完成し、妖精の国の王様というメタフィジカルな世界へ昇華した勇者ヤーノシュ。一方さまざまな矛盾を抱えながら、感情と欲の求めるままに現実社会での成功を成し遂げ、「生身」のハンガリー人像にたどり着いたトルディ。2人とも原初の罪と非常な力を携えて社会の底辺を出発し、苦悩に満ちた長い道程を歩み、幸福の成就へ向って猛然と突き進む。2人の人間性には大きな隔りがあるが、いずれの人物像にもハンガリー農民の生命力や潜在力を示す象徴を見ることができるようと思われる。どちらがより生粋のハンガリー人像であるのかを問うことは一概にはできないだろう。その答えはおそらく、読み手がどの時代のどのような社会的コンテクストに生きながらそれぞれの人物像を捉えるかによって、おのずと生まれてくるものではないか。

参考文献

- Alföldi Jenő (szerk.), 2001, *Arany és Petőfi levelezése*, Mágus kiadó, Budapest.
- Fábri Anna, 1987, *Az irodalom magánélete*, Magvető, Budapest.
- Gyulai Pál, „Toldi estéje”, *Szépirodalmi Szemle*, 1854.
- Horváth János, 1927, *A magyar irodalmi népiesség Faluditól Petőfiig*, Akadémiai kiadó, 2. kiad., Budapest, 1978.
- Illyés Gyula, 1936, *Petőfi Sándor*, Móra, Budapest.
- Keresztury Dezső, 1937, Arany János, <http://mek.oszk.hu/01300/01360/01360.htm>
- Margócsy István, „…Ikerszülöttek, egymás kiegészítői…” (Petőfi és Arany kettős kultusza és kettős kanonizációja), *Irodalomtörténeti Közlemények*, 62/4-5, 2003.
- Móricz Zsigmond, Arany János írói bátorsága, *Nyugat*, 1931, II. 613–621.
- Nyilasy Balázs, 1998, *Arany János*, Korona kiadó, Budapest.
- Sőtér István (fő szerk.), 1965, *A magyar irodalom története 1772-től 1849-ig*, III. köt., Akadémiai kiadó, Budapest.
- Szerb Antal, 1935, *A magyar irodalomtörténet*, 2. kiad. Magvető, Budapest.

(2008. 12. 24 受理)